

ペリカン日記

下

弓場律子



ペリカン日記

下

弓場律子





昭和33年だと思う新婚時代のパパとママ



昭和 63 年 パパ, ママ



昭和46年頃（かな？）綾子、パパ、律子、ママ



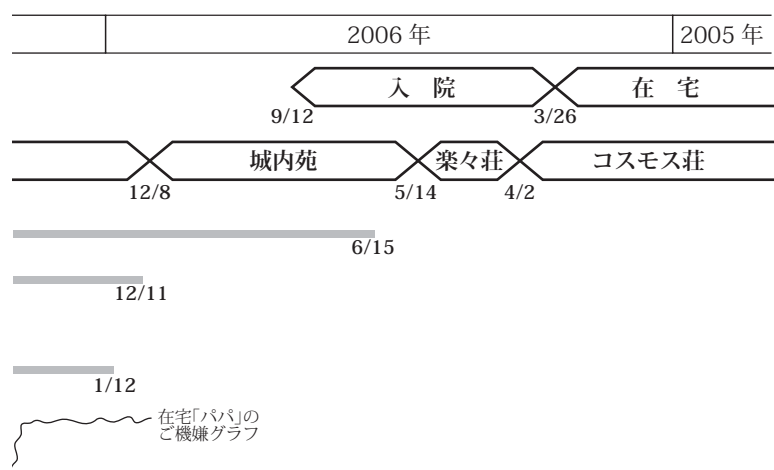
昭和 63 年 里沙、文一、康史、綾子、パパ

ペリカン日記（下巻）——パパとママの介護日記 目次

第一章

第二章

第三章



2月12日	律子インフルエンザ	327
4月27日	パパ虫垂炎で入院	113
1月12日	ママ圧迫骨折	37
1月5日	高槻市内の特養見学開始	31
12月14日	ママのパニック事件	10
		i
		27
		289

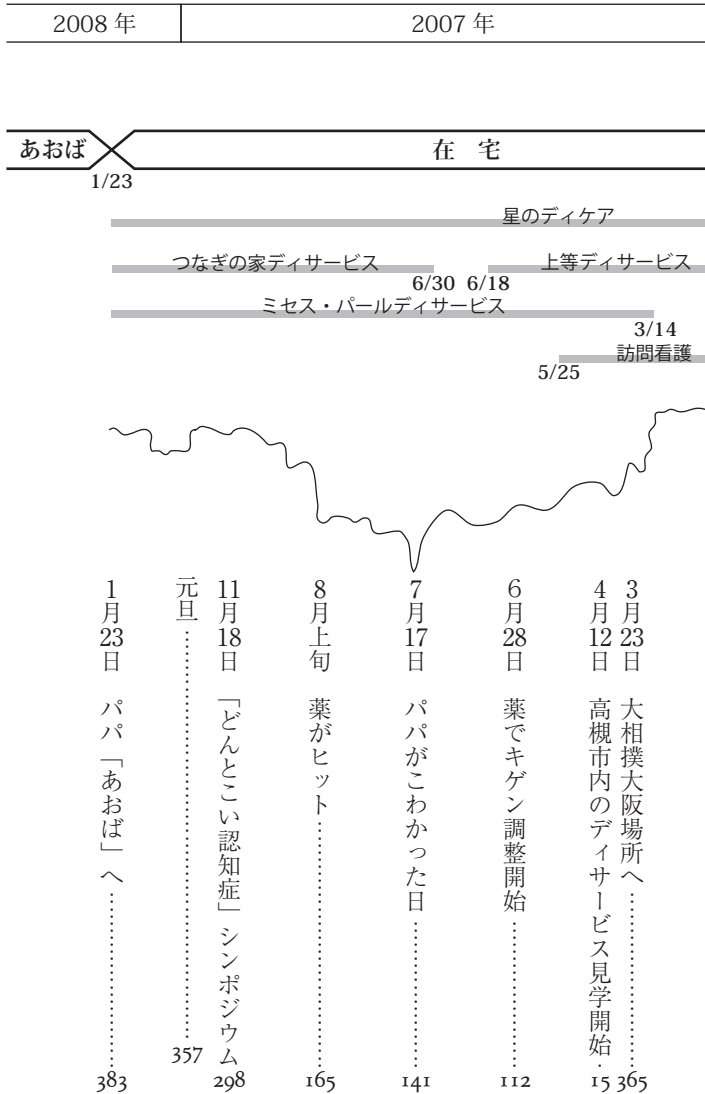
第四章

『弓場律子さんの両親介護日記の発刊に寄せて』
あとがき
『小山のおうち』へ行ってきました！

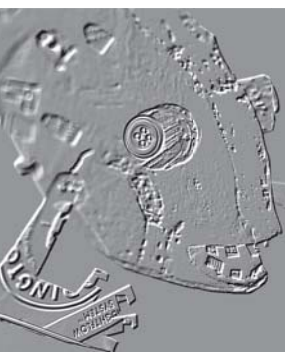
397

398

393



下巻 上巻



第三章

2007年

4月1日（日）

昨夜、20時25分、オシッコ＋小パッド交換。パパ「歩いと思ったら人が、今年のご飯は温かくて美味しいですよって言っとったわ」22時、オシッコ。パパはゴソゴソ、「もう、そろそろ起きよか？」22時30分、オシッコ。パパの右側に敷いているフラットパッドをグチャグチャにするので取る。0時15分、オシッコ。2時5分、オシッコ＋小パッド交換、出た出た。3時55分、オシッコ＋小パッド交換。6時50分、オシッコ＋小パッド交換。

8時、起床。オシッコ。朝食後のウンコ誘導は何も出ず。足どりはソコソコ。今日のパパは体が前傾、珍しい。机にしがみついたり、腕組みした腕を机に乗せて居眠りをしている。はっさくを食べてもらうことで少し目を覚ましてもらってからトイレ誘導。11時30分。立ちシヨン230cc。1階1周。

11時45分、昼食を持って姉さん来。今日はお通夜になったとのことで14時に帰る。その後パパと近所を散歩をするが、雨が降ってきたのですぐに帰る。15時、トイレ誘導、オシッコ。16時、トイレ誘導、立ちシヨン200cc。帰りは膝折れ、抱えて戻り私の腰がビリッ。その後パパは右側に傾き、椅子から落ちそう、柱の横に椅子を動かす。

今日は1日中眠ったり眠ったり、と眠っているパパだが、起きている時は話をよくする。一番面白かった話、私「今日はよう眠るなあ」パパ「ここでは、なんぼ眠っても金は取られんからなあ」私「眠ってるだけで金取られるか？」パパ「そうよ、他の所でやったら、眠っているだけやのに、ごっつい金取りよるんや」ほう、そういう言い方もあるか。確かに、デイなどですーっと眠っていてもお金は取られる……。パパ、ようわかつてるんやん？私「ほんまやなあ、他の所では起きてんと損やで」19時15分、就寝。足さすり。

朝…定番。

昼…海鮮ばら寿司、みそ汁。

おやつ…ムーンライト、コーヒー。

晩…八木さんに貰ったいろんなおかず、すき焼き雑炊。

4月2日(月)

昨夜20時45分、オシッコ＋小パッド交換。パパひとり言。21時45分、眠ったようす。22時15分、オシッコ。23時25分、オシッコ。1時55分、オシッコ＋小パッド交換。4時20分、オシッコ。5時5分、オシッコ＋小パッド交換。

7時40分、起床。オシッコ＋。パパに靴下を穿かせて、パッチを足に通し、ズボンを足に通し、オムツを外し・・シマッタ！リハパン穿かすのを忘れてた。やり直し。8時40分、食後のウンコ誘導で浮きバナナ多量、水面に空きなし。

9時35分、訪看で今本さん来。今日は浣腸なしの30分コース。

10時40分、『上等』のお迎え来。私はペリカン日記を配りに『友快』と『星の』へ。

14時45分、おけいさん来。お泊まりで夕食を作ってくれる。おけいさん「何作る、何食べたい？」私「そういうの、考えたくないの。美味しいもんが食べたい」一緒に関スパへ。おけいさん「あー頭全然まわらへん。何しよ」私「姉さんみたいなこと言わんといて」

17時、パパ『上等』より帰宅。摂津峡まで花見に行ってきたらしい。オシッコは13時30分と16時35分に出たとのこと。よしよし。

17時45分、呼んでないのに康史が来。夕食を食べて帰るという。私「普通は突然来ても無いで」おけいさん「りつちゃんのDNAが入ってるなあ」以前は私も、おけいさん家に美味いもんがある時は呼ばれなくても必ず現れる、という有名人だった。パパは康史が来てから少しハイになり声が大きく、よくしゃべる。19時になっても目はパッチリで話が止まらない。

19時20分、ベッド誘導、だが着替え拒否。19時45分、着替え終了。オシッコ、足マッサージ。いつもはここからゴソゴソが始まるのだが今日は話疲れたのか、直ぐ眠りにつく。20時30分、オシッコ＋小パッド交換。

夕方からビール500mlを2本ずつ、酎ハイ350mlを1缶ずつ、おけいさんが持ってきてくれた赤ワインを2人で1本空けてしまった。23時頃寝たが、その辺りの記憶なし。寝る前にパパのチェック、オシッコ＋小パッド交換をした、はず・・・。

朝：定番。

晩：朽木産の菜の花と貝柱のとりみ煮、豚のオクラ巻き焼、ホルモンと豆腐のピリ辛煮、玉葱スープ、ご飯。

『弓場律子さんの両親介護日記の発刊に寄せて』

星野征光（星のクリニック院長）

ある日のデイサービスでの食事前の弓場父娘の会話の場面

「今日は湯葉のお吸い物だよ。湯葉の吸い物・共食いやなあ、湯葉は高級食材やでえ」、「そうよ、湯葉は高し（お父さんの名は、弓場 隆＝ゆば たかし）よ」、「へええ、さえてるな」、「へっへっへっ」「すごい！」

積み上げると優に15cmはありそうなこの両親介護日記・・・その大部分は、うんこ小便まみれの格闘記ですが・・・の中の一光景で、とてもほのぼののとして、救われる描写です。しかし、この介護日記を全部読み通すのは正直なところとても苦痛でした。何よりもその分量!!それと、律子さんご両親が体験した医療福祉の現場への容赦ない批判の目の鋭さの雨アラレ!!そこで働く専門家たち（医師、看護師、介護士など）の右往左往ぶり!!私を含めて彼ら彼女たちは、口をひらけば、「一生懸命やっています」と言うのですが、このすれ違いの距離の深さはどうやったら埋めることが出来るのか、言葉がありません。

お父さんが施設入所された後、これを本にするが『星のクリニック』と私の名前を実名で出していいかと言われ、言いたい放題言われてしまい、あまりに悔しいから、「一言書かせろ」と言ったものです。

私と弓場一家との関わりは、お母さん（信子さん）が脳梗塞の後遺状態で、失語症になり、他院入院中のところに往診を依頼されてからになります。退院後当院でリハビリをかねて重度認知症「デイケア」で在宅を支援していく様になったのです。こうしたケースを見たことがほとんどなく、又リハビリと言っても言語聴覚士がいるわけでもないのです、躊躇しましたが、他に行くところもないということで、とりあえず通ってもらうことにしました。

お母さんは、通所を重ねるごとに、メキメキと明るくなり、又会話も部分的に成立するようになっていきました。不安を持って受け入れた私もスタッフも望外の喜びとなったものです。残念ながら、その後また脳血管障害を起こし、長い入院生活の後、なくなられるのですが・・・。

他施設に入所中のお父さんも同時に通所を、ということ、当院デイケアで長いこと会っていないお父さんの顔を見た途端お母さんが極端に緊張し、無言になってしまったこともあり、同時通所は断念したのですが、お母さんの入院と前後して、お父さんを引き受けました。

この日記の随所に、冒頭に掲げたような親子の会話が出てくるのですが、とんちんかんであることは事実ながら、妙に心に響いてしまうのです。降さんはデイケアの中でもご機嫌な日々は少なく、ちよつとしたことをきっかけに、あるいは前触れもなく、「さあ殺せ！さあ殺せ！！」の怒鳴り声が続くのですが、律子さんは、自宅での介護場面の怒鳴り声を「わしは生きている価値があるんか、わしは人から必要とされているのか、わしは愛されているのか、どやねん、はつきりせんかい」と叫んでいるように思えた。と述懐されていますが（資料※）、これは日々格闘されてきたご家族でしか感じとれない至言で、うーん成る程なあ、と唸ったものです。

星のクリニククのデイケアでの関わり、私の精神科医としての関わりも極めて不十分であることは律子さんの書くところですが、通過された施設、病院にとっても、この辛辣な記録は自分たちの日常の営為を振り返るのに、大変参考になる、と言えはきれいですが、正直なところ言葉を吞むしかないでしょう。

その後、お父さんは、グループホームに入居され、何とか平穏な毎日を過ごされるようになっており、月1回の往診でお会いするばかりになっています。律子さんは、建築士だそうですが、言語聴覚士を目指して専門学校に行くことにしたそうです。その話を聞いたとき、「これだけボロクソに言ってきたのだから、看護の方に進んで思う存分看護をやってみたら」とちよつと皮肉を込めて言えば、憎たらしいことに「私、看護とか、医療とか嫌いやねん！」とサラリと宣われてしまいました。ご両親の介護をこれだけ徹底的に泣き言一つ書かず記録されたのは、このあつさり感があつたからだと変に納得させられてしまいました。しかし、本音はそんなものではなかったでしょうが・・・。

お父さんの入所している施設では、オウムが飼われています。そのオウムに「ゆばたかし、ゆばたかし」と通りがかりに吹き込み続け、とうとう「ユバタカシー!」と言わせるようにしてしまった律子さん!!とても献身的な娘さんですが、この一事をとっても分かるように、

あなたはとても、とても、とても変な人です!!

資料※：公開市民講座『どんとこい！認知症』シンポジウム 「重度認知症患者デイケアの挑戦」の星野征光の発表から 日精診ジャーナル平成19年度第4回理事会より抜粋

症例3 男性で78歳、脳血管性の認知症です。多発性脳梗塞があります。（中略）話す時はかなり大きな声で自分の思いらしきものを話されます。ときどき「さあ殺せ、殺せ、さあ殺せ」と、止まらなくなります。デイケアでもあります。自宅でも止まらなくなる。デイケアではそれに「うるさい」といつて反応する方も出たり、場がシーンとなり困っていたのですが、最近ではスタッフが「そんなに大きな声でいわれなくてもわかりますよ」と、すぐに介入すると声のトーンが下がり、何か言い訳めいたことを言われるようになった。（中略）娘さんとの会話のなかで、飯を口まで運んでくれる、下を、大小便のことですが、汚しても嫌な顔をせず始末してくれる、こんなに親切にしてくれるのはどうもおかしい、何か自分に対してたくらんでいるのではないか。というふうに発展していつて、さあ殺せとなるではということでした。

さらに彼女の分析するのには、いろいろ試して現在はデパケンという薬で夜間睡眠もよくとれるようになり、さあ殺せの意味合いが違ってきたように思うとのこと、「今はある程度了解できる原因らしきものがわかるようになった。しかし、デパケンが効くまでの『さあ殺せ』は、時間の流れの違いからくるそれをパニック殺せと名付けるなら、アイデンティ殺せとでも名付けようか。あの『殺せ』は怖かった。『わしは生きている価値はあるんか、わしは人から必要とされているのか、わしは愛されているのか、どやねん、はつきりせんかい』と叫んでいるように思えた。ものすごい迫力での迫り方であった」ということです。「だいたい殺せと言わないまでもパニックを起こさせる一番の犯人は病院の医者と看護師だ。いつもヒヤヒヤさせられる。こっちは客や、対応の仕方をもっと勉強してもらいたいもんだ」と付記されており、しゅんとなっていました。（中略）娘さんは医療のプロ以上の観察をされてきたわけです。つまり評価することは24時間付き添っておられるご家族の観察や評価解釈なしにはより正確なものになり得ないと思った次第。人が一番つらいことは無視されることと思いますが、この方の「さあ殺せ」はそもそも人としての根源的な問いかけに思えてなりません。

あとがき

改めて読み直してみた感想は、こいつ（自分のこと）オシッコ、ウンコばかり言うてアホとちゃう？特にウンコへの執着心はちよつと病的なものを感ぜ苦笑した。両親の介護に専念した2年8ヶ月の間は、結構面白かった。介護は意外と面白い。

まあ、私の場合は選択の余地がなくて介護をしていたわけでもなく、自分で選んだということも多分にあるので、その辺が世間とは決定的に違ふところなのか、また最後の最後、もうアカンと思つたら突然消えてやろうと決めていた分、気持ち的に余裕があったのかもしれない。介護をするようになって知り合った人達も面白いキャラが多かったので、ここまで来ることが出来たように思う。感謝。

私自身が介護をしたことによって少し変わったような気がする。ケセラセラはもとの性格なのだが、ケセラセラに確信がもてるようになった感じがする。

パパはこれからどうなっていくのかなあ、心配。『GHあおば』にはへりっちゃんのイチャモンノートと題したレポートをちよくちよく渡したりと相変わらず小姑を続けており、とてもお気の毒です。

一筆書き添えて頂いた星野先生、この本を作るにあたって原稿チェックをして頂いた「おけいさん」こと吉田桂子さん、西能子さん、おけいさんの友人、あや子さん、本の総合デザインをして頂いた河野千尋さん、表紙をお願いした長田恭子さん、そして、土壇場で全面的に仕上げをお願いした印刷会社の山田さん、本当にありがとうございました。

追記、この本に出て来る団体名と個人名は基本的に仮名で、了解があるものだけは実名で書かせていただきましたが、特にその別は（必要もないので）明記していませんのでご了承下さい。

『小山のおうち』へ行ってきました！

2008年3月28日

『星の』以外の重度認知症「デイケア」ってどういうことをしてるのかなあ？という素朴な興味を去年の（ほんとこい認知症）のシンポジウム（2007年11月18日、東京・有楽町　よみうりホールにて開催）以来持ち続けていたのですが、そのひとつである出雲の『小山のおうち』へ見学希望の電話をしたところ、「見学ではなく、1日体験訪問という形で来て頂くのであれば・・・」という願っても無い言葉を頂き、望むところ、と3月26日に行ってきました。

しかし、行く間際になると私の心はひるみます。だいたい介護の仕事をしているわけでもなく、ただ、認知症の父を持つというだけの私に興味があるというだけで伺って失礼ではないのか？小山のスタッフも何をしにわざわざと気分を害されているのではと、また、答えに窮する質問をされたらどうしよう・・・等々、不安は募ります。でも、来ても良いよって言ったもんねえと開き直り、出かけました。

朝10時に何う約束をしていたのですが、9時半に現場へ着くことが出来ました。ここでまた私は悩みます。約束の10時まで待とうかな、もし今行つて10時までの間が保たないようなら10時から3時までの間は保つのかい？いやあゝ困ったなあ。

だいたいそんなことで悩むやつが1人で出雲まで行くか？私はアホか？と己を叱咤激励し、9時半にインターフォンを押しました。

既に2名の利用者の方が来られており、全員がそろうまで「よう来られた」と話し相手になってもらったり、肩を揉んでもらったり？で全員が揃うまでに最初の緊張は消えていました。

10時30分、当番の利用者の鳴らすベルを合図に1日が始まりました。今日の利用者は12名、スタッフは4～6名です。まず、私の簡単紹介とお土産（えんまんロールというお菓子）とお茶を飲み食いしながら利用者1人1人に今日の気分や体調などを話

してもらおう『朝の会』が行われました。

午前中のプログラムのテーマはお客さんである私です。大阪から来た事や、両親の介護をした事、2人姉妹である事、現在無職である事、以前は設計の仕事をしていた事、言語聴覚士を目指している事、オシャレに全く興味が無い事、一文無しになった時の事、介護施設を見学するのが面白くなってきた事、交通事故を10年で3回もした事、海外旅行先で強盗に襲われた事……等々。スタッフや利用者に質問されることに答えている間に、いっぱい喋っていました。

スタッフは私の話を聞き出しながら利用者の記憶や感情を引き出すべく、利用者に話しかけて返ってくる話によって会話を盛り上げていきます。

ふと、時計を見ると12時半になっていました。昼食は宅配弁当で私も一緒に頂きました。お茶も利用者が入れてくれますし、食事中もいろいろ話しかけてもらいました。食後は昼寝も一緒にしてしまったのですが、枕も毛布も利用者が持ってきてくれましたし、いたれりつくせりです。まあ、私はお客さんだからいいか！と完全に甘え、居心地バツグンでリラククスしまくりです。

午後のプログラムは、私が大阪から来た事、利用者の方にも大阪に行かれたことがある方や兄妹や親戚がおられる方、また、以前住んでいた方もいらつしやったので、大阪VS出雲というテーマで食べ物や方言の違う話になり、スタッフは私や利用者に話をふりながら盛り上げていきます。

私が興味を引かれていたサイコドラマとはこれか！というところまではいきませんでした。多分、こういう会話をきっかけに生まれるのだらうなあ。という感覚は何となくですが、つかめたような気がしました。

1日のプログラムが終わる頃には、今日私が何をしにここに来たのかはさておき、『ああ、面白かったなあ、また来たいなあ、今度はたこ焼きを作りに来なければ』などと呼ばれてもいないのに次回の作戦を考えていました。

利用者を見送り、私も帰る時間になってスタッフの太田さん（私の担当者）に『小山のおうち』について書かれた本を教えてください。定期的に出されている『小山のおうち新聞』や高橋先生がされている『交流塾』という認知症の勉強会の冊子を何か頂き、そうか昼寝をしている場合じゃなかったんだと、やっと気づいた次第です。

帰ってから『輝くいのちを抱きしめて』という高橋先生が書かれた本を読むと、私が体験させてもらったのは「演出性集団精

神療法」というものだったようです。

これが現場で見ていると一見簡単そうなのですが、なかなか、成功させるにはかなりの観察力と情報収集力とヒラメキと会話術とスタッフ間のチームワークが必要だと思われ、その天才と呼ばれた石橋さん（現在はもう辞められた方）はどれだけ凄かったのか、一度体験したかったなあ、と残念無念ですが、利用者の生き生きとされている目と、落ち着かれているというか『ここで私は認められている』と安心されている姿、スタッフのさりげない言葉掛けと振る舞い、なにより利用者もスタッフも本当に楽しまれている姿がとても印象的でした。

パパ、私（律子）

